

## King Richard II

— a historical play —

友 清 蓉 子

形式と伝統とを一身に担った中世紀最後の王と Richard 王を見做す時、そこにはおのずと一つの時代の終焉とそれに対抗し得た新しい時代の黎明とが予感される。そしてその二つの力の拮抗がいかにもそれにふさわしく、あたかも歴史の轍がゆるぎなく圧倒的に廻るが如く描かれたのが、この King Richard II である。

同じ頃に書かれた Christopher Marlowe の Edward the Second は、筋の展開と主題に於て King Richard II と類似してはいるが、作品全体の与える効果で著しく異っている。<sup>(1)</sup> 一因は、前者が私的で personal な次元を描いているのに対し、後者は二人の main character の言動が私的次元に止まらず、一方が王権神授説に支えられ、他方が anointed king を廃黜してしまおうという倫理的大問題を抱えていることによると言えよう。

王権神授説に拠れば、いかなる理由があろうとも、神の代理者として聖油を受けた王を廃する事は、とりもなおさず神に手をあげる事であった。私的次元で Gloucester の死に関り、アイルランドの謀反人討伐の軍費捻出のために領土を賃貸、空手形を乱発、Gaunt の死をいいことに嫡嗣 Bolingbroke の財産を没収する、追従者に囲まれた気まぐれな、理想的な王にほど遠い Richard と、最初は自らの権利を主張して没収された財産と地位の返還を要求して軍を率い、後に表向きは王の犯した罪による退位という形をとって Richard を廃黜した Bolingbroke は、それではどのように描かれているだろうか。

Richard に関する限り、批評家の意見は似かよっている。人間的に

“boyshness” (Dowden), “unbalanced personality” (Leonard F. Dean), “folly, vice, weak and womanish regret” (Hazlitt), “consistent inconsistency” (A. P. Rossiter) という弱点を持ちながら、一方、“an exquisite poet” (Pater), “a poet manqué” (Richard D. Altick), “a self-absorbed lyric poet” (Tillyard) と、詩人の持つ感受性と、“a special kind of power and insight” (Dean) を備える悲劇的人物としてみなされている。一方、Bolingbroke の方は意見が両極に分かれる。即ち、“ambitious, resolved to win the throne” (Dowden), “an ambitious and politic usurper” (Hazlitt), “he (Bolingbroke) has calculated hypocrisy” “a villain in his usurpation, it is certain that he is a schemer” (R. F. Hill), から “a tacit vice” と考えられる “opportunist” (Bretons Stirling) であるとする中間派を経て、“he appears to be born upward by a power beyond his volition” (Dover Wilson), “he has relied in large part on fortune” “he has no steady policy and having once set events in motion is the servant of fortune” (Tillyard), “a fortune’s minion” (Irving Ribner), “the action throughout the play seems to develop through some force of its own, or by divine will” (Wolfgang Clemen) に到る。

この決して折りあう事のできそうにないこれらの反応は、実は、同じ処に根ざしているのである。Bolingbroke が一度も本心を、audience にさえ、明かさぬこと。一旦事挙げをしたとみるや、たちまちのうちに王位についてしまう Bolingbroke は、沈黙という “policy” を堅く守りながら、着々と野心を成就してゆく有能な（あるいは腹黒い）政治家とも見えるし、時運に乗った運命の寵児という反応があつて然るべき様を呈してもいる。一方が Bolingbroke の沈黙の中にごめく人間の欲望を積極的に読み込むのに対して、もう一方は科白に表わされた事だけがすべてである（殊に

Shakespeare の作品の場合には)という前提に立って、言わないものは無いものと、言われた言葉は皆本当の事として受けとっているにすぎない。だから、それをどちらの極から見るにせよ、見えているのは、即ち、作品としてあるのは、この二つの極の拠って立つ処、“silent king” と呼ばれる Bolingbroke であり、そこから生まれる ambiguous な状況である。

二つの力の対立は戦闘という action の形をとらない。これに関して Irving Ribner は次のように述べている。

Richard is the author of his own downfall and Richard's deposition emerges as the result of his own character, rather than the antagonism of Bolingbroke.<sup>(2)</sup>

“author of his own downfall” については先きに挙げた Richard の私的次元での悪徳を彼の没落の原因と考える事もできるが、<sup>(3)</sup> むしろ、窮地に立たされた Richard という人間の見える自分で自分の墓穴を掘っていくような character の指摘にふさわしく、Ribner があまり重視していない Bolingbroke の antagonism は、Richard のそういう character と、同格に見做す事ができる。Richard の譲位のいきさつは Bolingbroke が本心を明かさぬ ambiguous character であり、しかも彼の antagonism が間接的であるから Richard の character の結果という具合に表現し得たのである。Bolingbroke は決して直接王と位をめぐる争う事はしない。一方 Richard は徐々に力では追いつめられていくが、最後まで選択の余地を残されている。(Shall we call back Northumberland, and send Defiance to the traitor, and so die?) (III, iii. 129-130) そういう状況での彼の選択 (Bolingbroke の権利の復活を認めるという) は、Richard の心の弱さをあきらかにする。あとは坂をころげ落ちるように行きつく所へ行くのみであり、Bolingbroke は黙って、あるいは Richard の申し出をただ肯定しさえすれば王位はむこうからやってくるという次第である。

Richard に対する Bolingbroke の antagonism は劇の発端を成す。Gaunt によれば (God's substitute, His deputy anointed in His sight, Hath caused his death: (I. ii. 37-39)) Gloucester 殺しの主謀者は Richard である。Mowbray をその科で Richard に直訴する事は、即ち Bolingbroke の Richard に対する間接的な挑戦であった。事の真相を知っているらしい Mowbray (For Cloucester's death, I slew him not; but to my own disgrace Neglected my sworn duty in that case. (I. i. 132-134)) と、真相を発こうとする Bolingbroke の兩人を国外追放することによって Richard はこの急場を凌いだのであった。

永久追放の刑を受けて退場する Mowbray が、十年の刑を六年に減刑された Bolingbroke に言い残す言葉は無気味である。

But what thou art, God, thou, and I do know,  
And all too, I fear, the king shall rue. (I. iii. 204-205)

この事件は Richard に少なからざる衝撃を与えたようである。Bolingbroke に好意を持っていないのは明らかだが、王としては、得体の知れぬひよっとしたら王位を奪いかねない輩という意識がみえる。

Off goes his bonnet to an oyster-wench;  
A brace of draymen bid God speed him well  
And had the tribute of his supple knee,  
With 'Thanks, my countrymen, my loving frieds;'  
As were our England in reversion his,  
And he our subjects' next degree in hope. (I. iv. 31-36)

遠からず王位に関わる重大事に発展するであろうというほのめかしは充分である。

Bolingbroke の本心は誰れにも解からない。又解からなくしてある。彼がそういうはっきりとした ambiguous character としてあらわれてくるのは二幕三場以降である。アイルランド遠征で王が不在であるのに、追放

の禁を破り、軍隊を率いて帰国する Bolingbroke はすでに王位を脅す危険人物とみえる。しかし、彼の帰国の目的は奪われた自分の権利を回復する事であるとだけ述べ、もう一つははっきりしない。不在の王の代理を務める York の使者 Berkeley の問 “what pricks you on To take advantage of the absent time And fright our native peace with self-born arms.” (II. iii. 78) に対する Bolingbroke の返事は、時を移さず到着した York の登場によって妨げられ、ついで York 自身の言葉、“Comest thou because the anointed king is hence?” (II. iii. 96) は、それに続く York の感傷的な饒舌のために、Bolingbroke からうむを言わさず返答を引き出す力を失ってしまう。加えて York の最後の言葉、

……… chastise thee

And minister correction to *thy fault!* (II. iii. 105)

は、Bolingbroke に態勢立て直しのチャンスを与え、(My gracious uncle, let me know *my fault* ……… (106)) 王の代理として “rebellion” “rebels” (147) と難詰する York も Northumberland に、

The noble duke hath sworn his coming is But for his own. (II. iii. 149)

と、止めを刺されて、力尽きる。York の “I do remain as neuter” (159) という言葉をもって、この問題は以後不問に付される事となる。<sup>(4)</sup>

本人がいかにも “come for my own” と、言明しようと、“they stay the fist departing of the king for Ireland.” (II. i. 289-290) と、Bolingbroke の意図をほのめかす Northumberland の言葉、そして何より実際に王の留守中に帰国したという事実は、正義を叫ぶ Bolingbroke に暗い影を落とす。

アイルランドから帰国したばかりの Richard は anointed king としての自信にあふれている。

Not all the water in the rough rude sea  
 Can wash the balm off from an anointed king;  
 The breath of worldly men cannot depose  
 The deputy elected by the Lord. (III. ii. 54-57)

しかし、この自信も次々ともたらされる凶報 (Bolingbroke の間接的 antagonism) によってなしくずしにされ、Bolingbroke 自身が王の眼前に姿を現わすまでに Richard の敗北は確実に準備される。軍勢からいっても Richard に勝目はなかったが、二人が面と向かいあった時には、王はすでに精神的な敗北を約束されていた。三幕二場はこの過程を描いている。

Richard の帰国が一日おくれたために一万二千のウェールズ軍が解散したという Salisbury の報告を受けて Richard は色を失う。しかしこの打撃からは Aumerle の “remember who you are” (III. ii. 82) という励ましを受けて、自分が王である事を思い出し、(Am I not king? (83)), あつい神の加護を受ける王の御位は、王というだけで失った軍勢の力を持つはずである、(Is not the king's name twenty thousand names? (85)) と、思いなすだけで立ち直る。

ついで “care-tuned tongue” (92) を自称する Scroop が登場する。Richard は身構える。

Strives Bolingbroke to be as great as we?  
 Greater he shall not be; if he serve God,  
 We'll serve Him too and be his fellow so: (III. ii. 97-99)

人間として最高の位にあり、神によって選ばれた、神の代理者であるはずの自分を、神の前では Bolingbroke と同等であると規定して報告を求める Richard の耳に Scroop は、その譲歩さえ打ち砕く知らせをもたらす。Bolingbroke の勢力は日増しに強まり、老若男女、国民がこぞって Richard に背をむけ、Richard の寵臣 Bushy, Green はすでに Boling-

broke の手で処刑されたと聞くと、もはや Aumerle の慰めも役に立たず、Richard は最後の確かなよりどころ、悲しみも痛みも感ずる一個の人間として自らを規定し直す。

……mock not flesh and blood

.....

I live with bread like you, feel want,

Taste grief, need friends: subjected thus,

How can you say to me, I am a king? (III. ii. 171, 175~177)

最後に York の率る軍に望みを託して、Bolingbroke と最後の勝負をする決心をするが、それも、York の裏切りの報にあえなくついでる。

“woe's slave” (210) が Richard の最後の自己規定であった。

Bolingbroke の antagonism はこういう形で、Richard をじりじりと追いつめていったのである。

Flint 城に立てこもった Richard と、Bolingbroke の出会いは、いかにも偶然に富み、ここでも Bolingbroke の ambiguous な一面を感じさせられる。三幕三場、

Percy. The castle royally is mann'd, my lord,

Against thy entrance.

Bol. Royally!

Why, it contains no king?

Percy

Yes, my good lord,

It doth contain a king; (21-25)

二人はいつかは相対さねばならなかったにせよ、いかなる理由でこういう出会いが設定されねばならなかったのか。そこに Bolingbroke をあからさまな王位篡奪者とせぬ作者の注意深い意図が感じられないであろうか。

Bolingbroke の片腕である Northumberland の扱いも又、この点で注

意をひく。後に Richard によって “Bolingbroke が王位へ登るための梯子だった” (V. i. 55) と称されるが、劇中 Northumberland の果たした役割で、“ladder” と言われるほど決定的なものは見あたらない。むしろ彼は、Bolingbroke の “usurper” としての汚ない側面を一手にひき受け、これによって Bolingbroke は単なる usurper と、速断を許さぬ存在と成り得たのである。

まだ王位の譲位なぞ問題にならぬうちに、王を “Richard” と呼びすてにして、(名前の上での deposition) York の輿蹙を買うのは Northumberland である (III. iii)。Bolingbroke の追放の取消しと、所領の返還の申出を携えて Richard に謁見した際、礼を失して、“We are amazed; and thus long have we stood To watch the fearful bending of thy knee” (III. iii. 72-73) と、Richard を怒らせたのも彼であった。

Bolingbroke はあくまでも Richard に対して礼を尽し、その要求は私権の回復の域を逸脱しない。Northumberland はこの時点ですでに Bolingbroke と対照をなし、少なからず後者の汚名を救っている。

Northumberland を介した Bolingbroke の要求を Richard は難なく受諾する。しかし、この選択は、Richard の運命を決定してしまった。一旦追放を宣告した者に、その取消しを迫られて、易々として受け入れたというみじめな思いが Richard を襲うからである。王としての誇りは傷つき、自ら王の資格を失ったと感じたかのように Richard はつぶやく。

What must the king do now? must he submit?

The king shall do it: must he be *deposed*?

The king shall be contented: *must he lose*

*The name of king?* O' Grod's name, let it go: (III. iii. 143-146)

antagonist による “deposition” のほのめかしは、まだどこにもない。にもかかわらず王は自らそれを口にするのである。Bolingbroke の謁見の申し込みを伝える Northumberland の口上 (III. iii. 176-177) に見られ



る, “base”, “down” という言葉が Richard には deposition を裏書きするかのよう響く。

*Down, down* I come; like glistening Phaethon,  
Wanting the manage of unruly jades.  
In the *base* court? *Base court*, where kings grow *base*,  
To come at traitors' calls and do them grace.  
In the *base* court? Come *down*? *Down*, court! *down*, king!  
(III. iii. 178-181)

時が熟して味方の勢力が増すまでの “gentle words” (131) であったはずのものが、皮肉にも Richard 自身を傷つけ、同じ言葉をくり返す科白には Richard の心の弱りと、救いようのない没落への徴しがみえてくる。

Richard と向いあった Bolingbroke はここでも決して自分から王位を要求したりはしない。Richard の側から、

Up, cousin, up; your heart is up, I know,  
Thus high at least, ……… (194-195)

と、王冠を示めされても、

I come but for mine own. (196)

と、誘いにのらない。しかし、Richard は相手の言葉を、自分の言葉にくみ変えてしまう。

Your own is yours, and I am yours, and all. (197)

これに応ずる Bolingbroke の言葉、

So far be mine, my most redoubted lord,  
As my true service shall deserve your love. (198-199)

自体は neutral であるが、

Well you deserve: they well deserve to have,  
That know the strong'st and surest way to get. (200-201)

What you will have, I'll give, and willing too; (206)

という王の言葉を聞いた後では, *ambiguous* にみえてくる。

Rich. Set on towards London, cousin, is it so?

Bol. Yea, my good lord. (207-208)

London 行きとは, 即ち, Richard にとっては *deposition* を, Bolingbroke にとっては *coronation* をさす。Richard の申し出である London 行きを, Bolingbroke が肯定し, ここに事実上, Richard の Bolingbroke への譲位が成立したのである。言葉の上でも, (いわんや戦闘という形をとっては直更の事), 一度として, 自ら王位を強要する事なしに Bolingbroke は Richard の口から譲位の同意を得たのである。Bolingbroke の *ambiguous character* と, “*author of his own downfall*” たる Richard の *character* とが, 見事にかみあって, 歴史はゆっくりと次の軌跡を描き始める。

あとはこの譲位の取り決めを公表するだけである。口火を切って事を公けにするのは, York である。又しても, Bolingbroke は自分の意志で, というよりはむしろ, 間接的に, York を通して Richard の同意と希望を受け入れる, という形をとって, 即位の意志を表明する。

篡奪の“誤解”を避けるため, (*without suspicion* (IV. i. 157)) Bolingbroke は公けの席での王位の引き渡しと, Richard の過去の罪状のリストの Richard 自身による朗読とを, 準備する。罪状リストは, 結局不要に終わった。神の意志に背き, 退位にみずからの “*soul's consent*” (IV. i. 249) を与えてしまったと嘆く Richard が, はからずも Bolingbroke の懸念を一掃してくれたからである。

With mine own tears I wash away my balm,

With mine own hands I give away my crown,

With mine own tongue deny my sacred state,

With mine own breath release all duty's rites: (IV. i. 207-210)

神の御手ではない、神の僕である私のこの手が、涙が、舌が、息が、神聖にして冒すべからざる神との契約を反古にしようとしている。自分を神に対する “traitor” (248) と感じ、現実面では王位を失う Richard の苦しみは二重である。

Bolingbroke は黙って (silent king (290)) 安堵する。Richard が自らの手で自らを廃位した、と言ってくれば、この場で他に何を望もうか。

Northumberland だけが、苦悶する Richard に罪状のリストをつきつけて、四度も朗読を迫る。(IV. i. 222-227), (243), (253), (269)。

王の嘆きの言葉に割って入る Northumberland の強引さを、

Urge it no more, my Lord Northumberland. (271)

と、Bolingbroke は、たしなめる役にまわっている。

自分を “a mockery king of snow” と、Bolingbroke を、それをとかす “sun” と呼ぶ Richard が、王の威厳を失った顔を見たいと、鏡を望んだからといって、即座にそれを持ってこさせる Bolingbroke には、現実家、リアリストの顔が躍如としている。<sup>(5)</sup> もって来られた鏡を打ち砕き、悲しみが顔をくだいた、(my sorrow hath destroy'd my face. (IV. i. 291)) と自分の行為の意味を説明する Richard に、それまでおし黙っていた Bolingbroke は忽然と言葉を返す。

The shadow of your sorrow hath destroy'd  
The shadow of your face. (V. I. 292-293)

あれほど周到に ambiguous character として描かれてきた Bolingbroke が、これほどあいまいさを嫌う人物であったとは。“cunning schemer” という批評の生まれる所以である。新王のもたらす新しい治世の性格は、ここに垣間見られる。実質を見抜き、これを尊ぶ Bolingbroke には王権神授説を無条件に受け入れる素地は無い。

とはいえ、Richard に対する Bolingbroke の態度は、劇の最後まであいまいで、間接的で、Richard の寵臣達に対する態度 (III. i.) Gloucester 殺害に関する者達への態度 (VI. i. 158-161) の明快さと比較すると別人の観がある。

Pomfret 城に幽閉されていた Richard の死の扱いの微妙さは、それまでの王に対する ambiguous character としての Bolingbroke を裏切らない。

事の起こる前に、この事に関する Bolingbroke 自身の言葉はない。五幕四場で、間接的に、Exton を通して次のように語られる。

‘Have I no friend will rid me of this living fear?’ (2)  
 ‘Have I no friend?’ quoth he: he spake it twice,  
 And urged it twice together, did he not? (4-5)

Bolingbroke は Richard を殺せと、命令した訳ではない。

And speaking it, he wistly look’d on me;  
 As who should say, ‘I would thou wert the man  
 That would divorce this terror from my heart; (7-9)

Bolingbroke の眼の色で、Exton は Bolingbroke の心を判断する。Richard を殺せと示唆された。Exton の推測で事が運ばれていく事実は見逃せない。

突然入って来た暗殺者を二人まで Richard は殺すが、自分も Exton に打たれて死ぬ。

Mount, mount, my soul! (V. v. 112)

Richard の今際の際の言葉には、俗世への未練はなく、他を寄せつけぬ凜然としたひびきがある。

Exton はその場で王の血を称え、自分の行為に疑いを抱く。

As full of valour as of royal blood:

Both have I spill'd O would the deed were good! (V. iv. 114-115)

しかも, Exton は Bolingbroke から褒美をもらうどころか, 疎まれ, 遠ざけられる。

Bolingbroke 自身も,

I'll make a voyage to the Holy Land,

To wash this blood off from my guilty hand: (V. vi. 49-50)

と, 聖地へ詣る気持を述べるのである。

“poison”を必要と感じながら, “poison”を憎む, (They love not poison that do poison need. (38)) Bolingbroke の ambiguous character は最後までその一貫性を保っている。

Bolingbroke の ambiguous character は, ambiguous である事によって, 確固とした存在感を呈し, それは anointed king を戴く力と, 相対し, この二つの力は見事な屹立を成している。anointed king でありながら欠点の多い王, これを廃黜してしまった Bolingbroke。Richard を “author of his own downfall” に, Bolingbroke を ambiguous character に仕立て, Richard にむけられた Bolingbroke の antagonism を, 間接的なものにする事によって, この作品は, 倫理問題を奥にたたえた歴史劇として, 一応の成功をおさめたと言えよう。

main character である Richard と, Bolingbroke の性格, そしてその二人の関係が劇の性質を決定する最も大きな要因をなすのは当然であるが, 加えて, action となるはずであった決闘は中断され, 新王に対する謀反は事前に発覚し, “poet” と称される Richard の “詩” に強さ (intensity)<sup>(6)</sup> が感じられず, Bolingbroke が裁こうとした Gloucester 殺害の真相は, Mowbray の死によってうやむやに終り, と, こう並べてくると, おのずと, この劇の世界が感じられよう。これは曖昧模糊とした出口のない閉ざされた世界である。しかし, それだからこそ, 却ってこの劇は個々の人間の営みを越えた歴史の圧倒的な力を感じさせる。

**Notes:**

The Kenkyusha Shakespeare, King Richard II. ed. Sanki Ichikawa and Takuji mine を Text として用いた。

- (1) Wolfgang Clemen, Shakespeare and Marlowe, Shakespeare 1971. pp. 123-133 に二つの作品は詳細に比較検討されている。
- (2) Irving Ribner, The Political Problem in Shakespeare's Lancastrian Tetralogy, Twentieth Century Interpretations of Richard II, ed. Cubeta, p. 35.
- (3) King Richard II, (II. i. 33 ff.), (II. i. 106 ff.), (II. i. 205 ff.) (II. ii. 84ff) 参照。
- (4) 巧みに crucial point をはずす作者の意図は, Bolingbroke の ambiguous character としての性格づくりにある。
- (5) Dover Wilson, Introduction to Arden Shakespeare
- (6) R. F. Hill, Dramatic Techniques and Interpretation in 'Richard II', Stratford-Upon-Avon Studies 3 Early Shakespeare, pp. 101-123.